

養護学校在籍生徒を対象とした自己理解を深める指導の検討

— 「トリセツ」の作成を通して —

特別支援教育分野(16220907) 星野由佳

本研究では、対象生徒が自己理解を深めることを目標とした単元を構成し、実践を通して指導の有効性を検討することを目的とした。指導の結果、授業中の対象生徒の発言や記述から、本研究で行った指導が対象生徒の自己理解を深めることに有効であることが示唆された。今回深めることができた自己理解を活用して良好な人間関係を築くための指導や支援方法を検討することが今後の課題としてあげられた。

[キーワード] 自己理解, 養護学校在籍生徒, 自立活動

1 問題と目的

国立教育政策研究所(2011)は、自己理解を「キャリア形成や人間関係形成における基盤となるものであり、とりわけ生涯にわたり多様なキャリアを形成する過程で常に深めていく必要があるもの」としている。

子どもの自己理解の発達として、柏木(1983)は、「自己についての認知と他者についての認知は表裏の関係にあり、すなわち、自己理解の発達には他者理解の発達が、他者理解の発達には自己理解の発達が不可欠であり、両者の発達は本質的に分けては考えられない」と述べている。その後の柴田(2011)の研究でも、自己理解と他者理解は平行して発達することが確認された。しかしながら、吉井・吉松(2003)によると、発達障害のカテゴリーの一部とされている自閉性障害児は他者の感情理解に困難さがあることに加えて自己理解にも困難があること、また、自己理解の困難さが他者理解の能力にも影響することを指摘している。加えて、滝吉・田中(2011)は、発達障害者などはその障害から他者との関係性の中で自己を理解することが難しいと述べている。このことから、障害のある児童生徒に対して自己理解の支援や指導について実践や研究が進められていくことが必要であると考えられる。

以上のことから、本研究では、対象生徒が自己理解を深めることを目標とした単元を構成し、実践を通して指導の有効性を検討することを目的とした。具体的には、指導の中で設定した単元目標の達成度を通して指導の有効性を教材、学習活動、支援方法から検討することとした。

2 方法

(1) 対象

① 対象生徒

県立A養護学校に在籍する、中学1年生(以下、対象生徒とする)である。対象生徒は、集団場面での不安や緊張も著しい。気持ちが落ち着いている時は穏やかに周りとは接することができるが、自分の考えが通らない時にはその状況を受け入れることが難しいことが多く、ストレスが溜まってしまうと気持ちの切り替えが難しくなり、物を投げたり、物や人をたたいたりすることがある。学習活動には短時間であれば集中できるが、感情の起伏が大きく、授業に向うことが難しい時も多い。筆者が授業参観をした場面では、最後まで参加できていた授業は、自分の好きな活動を主に行う学習活動に限られていた。そのほかの学習活動では授業の途中参加や別室での学習あるいは廊下、体育館などで過ごしていることが多く見られた。

② 対象生徒が所属する学級

対象生徒の在籍学級は、対象生徒を含め男子生徒3名、女子生徒1名の計4名で編成されている。

(2) 期間

20XX年10月から11月に全4回実施した。日程の決定にあたっては学級担任と相談し、時間割や学校行事などを考慮して調整した。

(3) 指導場面

自立活動の時間を指導対象場面とし、自立活動の柱のうち「3. 人間関係の形成(3) 自己の理解と行動の調整に関すること」に関する一単元4時間の、自己理解を深めることに着目した指導を実施した。

(4) 記録と分析

記録はビデオ記録と対象生徒が授業中に記入、作成したプリント、指導者の筆記記録を用いた。ビデオは授業場面における指導者と対象生徒とのやり取りを映すことができる位置にカメラを設置し、記録した。筆記記録として、指導者と指導教員との事後研究会の話し合いの内容を使用した。対象生徒が授業中に記入（作成）したものについては、生徒ごとに封筒に入れて指導者が保管し、指導者が見る場合は対象生徒の許可を得てから見ることとした。

分析は、ビデオ記録、授業内で生徒が作成（記入）したもの、指導教員との事後研究会の話し合いの筆記記録から単元目標と授業目標について評価し、指導の効果を検討することとした。

(5) 倫理的配慮

対象生徒在籍学級の生徒全員の保護者に担任を通して書面による説明を行い、全員から同意書の提出をもって同意を得た。

3 実践の概要

(1) 単元の目標

単元名を「トリセツをつくろう」とした。単元目標として「自分を客観的に見つけ、自己理解を深めることができる」、「自分のことを文章やイラストを通して説明することができる」の2点とし、4時間の授業における各時間の学習内容及び授業の目標を設定した。それに加え、対象生徒の実態に合わせた個別の目標を授業目標に対応させて設定し、対象生徒の目標の達成を通して単元目標を達成するようにした。具体的な授業目標と対象生徒の目標を表1に示す。

表1 授業の目標と対象生徒の目標

授業時間	授業の目標	対象生徒の目標
1時間目	<ul style="list-style-type: none">・ゲームや学習内容の説明を受けて、本時の活動に見通しをもって活動に取り組む・プロフィールを記入することを通して、自分のことを説明する練習をする	<ul style="list-style-type: none">・本時の学習活動に見通しを持ち、活動に参加する・自分のことをプロフィールに記入する
2時間目	<ul style="list-style-type: none">・バドミントンを通して、自分がどの場面でのような気持ちになったのか説明する	<ul style="list-style-type: none">・活動の中で自分がどんな時にどんな気持ちになるのか意識する・活動を振り返りながら振り返りプリントに記入する
3時間目	<ul style="list-style-type: none">・自分の気持ちについての対処法を考えるために、前時を踏まえて自分の日常の行動を振り返る・振り返ったことをプリントに記入する	<ul style="list-style-type: none">・指導者の声掛けや促しによって自分の日常の行動を振り返る・振り返ったことをプリントに記入する
4時間目	<ul style="list-style-type: none">・前時を踏まえて、自分のマイナスの気持ちについての対処法を考える・考えた対処法をプリントに記入する・今まで記入してきたプリントをまとめて「トリセツ」を完成させる	<ul style="list-style-type: none">・指導者の声掛けや促しによって自分のマイナスの気持ちについての対処法を考える・考えた対処法をプリントに記入する・今まで記入してきたプリントをまとめて「トリセツ」を完成させる

(2) 教材

教材を「トリセツ（取扱説明書）」として授業内容を検討した。自分のトリセツを作ることを通して、普段対象生徒が意識していない自分のことを客観的に見つけ、捉え直すことをねらいとした。最近では、人気歌手の歌のテーマや、書籍でも題材として取り上げられており、対象生徒が興味や関心をもって学習活動に取り組むことができると考えた。「トリセツ」という形に残すことで振り返りが可能かつ、自己理解を深めることができる。クラスの生徒同士で読み合うこともでき、他者理解を深めることにも繋げることができることから、教材として設定することとした。

(3) 学習活動の内容

①1 時間目

自分の似顔絵と簡単な質問による自分のプロフィールを作成することとした。プロフィールには自分の名前や誕生日のほか、好きなこと、嫌いなことなど、表現しやすい自分のことに関する質問項目を設定し、回答を記入することで、自分を説明する資料を作ることを目指した。

②2 時間目

様々な場面でその時の自分自身の気持ちを理解することを学習内容とした。具体的には、1時間目で対象生徒が好きな活動と記述したバドミントンを通して、「うれしい」、「すっきりした」といったようなプラスの気持ちと、「悔しい」、「いらいらする」といったようなマイナスの気持ちについて、どのような時になることが多いのかを文字で表現し、プリントに記入することで自己理解に繋げることを目指した。

③3 時間目

日常の自分の行動を振り返り、自分の様々な気持ちについて考えることを学習内容とした。前時を振り返ったうえで、バドミントン以外の場面での行動を振り返り、どのような時にプラスの気持ち、マイナスの気持ちになることが多いのかを考え、記述することで他者に説明することができることを目指した。

④4 時間目

3時間目を踏まえて、自分がマイナスの気持ちになった時、又はならないようにするための対処法を考えることを学習内容とした。「～にならないように〇〇してください」や「～時には〇〇してください」のように取扱説明書としての書き方を

指導者が提示し、対象生徒が自分を客観的な視点で捉えて考えることができるようにした。

(4) 学習内容と支援の工夫

対象生徒の実態から、教室での学習活動に参加することができるような学習内容や支援の工夫が必要と考えられた。そのため、1)対象生徒が好きなアニメやキャラクターを用いて興味関心をもって取り組むことができるように学習内容を工夫すること、2)対象生徒の好きなこと、得意な活動を積極的に学習活動に取り入れること、3)制作活動や体を動かす活動を通して自己に向き合うことができるようにすること、4)教室での学習活動に参加が難しい場合、指導者がその時間に使う教材などを対象生徒に提示しながら教室での学習活動に参加するように促すこと、の4点を留意して授業を行うこととした。

4 結果

(1) 対象生徒の学習活動への取り組み

①1 時間目

初めは自分の名前とは違う名前や誕生日を記入していたが、最終的には自分の名前、誕生日、各質問項目について自分のプロフィールとして記入することができた。また、教室から出ていくことなく活動に最後まで参加することができた。

②2 時間目

プラスの気持ちについて、初めは何を書いたら良いかわからず戸惑っていた様子であったが、指導者の具体的な場面の例示をもとに考えることでプラスの気持ちになる時について記入することができた。マイナスの気持ちになる時についても、初めは「ない」と言い、未記入であった。そのため、指導者がバドミントンを行っていた時の様子を踏まえて「相手に点取られた時とかはいらいらしたりしないの?」と具体的に問いかけたところ、「もし相手に点を取られても、また次頑張ればいいという気持ちになるからマイナスの気持ちにはならなかった」という説明をした上で、プリントには『ない』と記入することができた。

③3 時間目

マイナスの気持ちになる時について『英語、国語、社会、理科、数学の授業を受けている時にいらいらした気持ちになる』と記入したが、プラスの気持ちでは『英語、国語、社会、理科、数学やほかの授業に最後まで出ることができた時うれし

い気持ちになる』とマイナスの気持ちと関連付けて記入することができた。

④4 時間目

書き方に少し戸惑う様子が見られたが、指導者とのやり取りや書き方のヒントが書かれたカードを参考にして、自分でマイナスの気持ちになる場面を想定し、その対処法を具体的に記入することができた。加えて、授業の計画として対処法の記入は2項目から3項目程度を想定していたが、対象生徒は8項目記入し、それについて「この順で行って欲しい」という順位を考えることができた。また、今まで記入したプリントをまとめて「トリセツ」の冊子を完成させることができた。

(2) 学習活動の参加の程度

1, 2, 4 時間目においてその時間の学習活動すべてに参加することができた。3 時間目は、授業開始時に教室での学習活動に参加することが難しい様子が見られたため、前述の留意点4)に沿って指導者が授業で使うプリントを見せながら本時の活動内容について説明を行い、教室での活動に参加するように促した。その結果、すぐに活動に参加することは難しかったが、自分で気持ちに折り合いをつけ、授業の中盤から教室に戻って学習活動に参加することができた。

5 評価

(1) 対象生徒の目標に対する評価

結果の対象生徒の学習活動への取り組みから、1, 3, 4 時間目の目標を達成することができたと評価した。2 時間目について、マイナスの気持ちに関する具体的場面の記入はなかったが、マイナスの気持ちになる時についても対象生徒の発言から自分の中で意識し考えていたと判断できたため、2 時間目の目標も達成と評価した。

(2) 単元目標に対する評価

前述の評価より、毎時間設定した9つの目標すべてを達成し、「トリセツ」を完成させることができたことから、単元の目標を達成することができたと評価した。

6 考察

(1) 自己理解の深まり

授業の中で、日ごろの自分を振り返り、自分がどのような時にどんな気持ちになるのかを考えることを通して、自分の感情と向き合い、表現する

ことができたと考えられる。そのことを踏まえて、特にマイナスの気持ちに関して、自分がマイナスの気持ちになる時は「こうしてほしい」、「こうしないでほしい」ということを区別し、それぞれに対して具体的に対処法を考え、順位をつけて記入することができた。このことから、この指導は、対象生徒の自己理解を深めることに有効であったと考えられる。

また、今回完成したトリセツを指導者が閲覧することを通して、今まで指導者が対象生徒について感じていた点と違うところや、対象生徒の新たな一面をいくつか見つけることができた。このように、「トリセツ」という形にして自己を表現する授業を通して、日ごろの観察からは教師が把握することが難しい児童生徒の内面を知るきっかけとなり、それを生かした指導や支援を考えることにも繋げることができると考えられた。

(2) 授業への参加

教室での授業に参加することが難しいという実態の中で、本単元では3時間目の前半を除く時間すべてにおいて教室での活動に参加することができた。3時間目の授業でも、授業開始から15分程度図書室で過ごした以外は教室に戻り授業に参加することができた。この理由として、学習内容や支援の工夫が考えられた。1時間目では対象生徒の好きなアニメやキャラクターを用いたゲームを導入として行ったこと、2時間目では自己の感情理解の手掛かりに体験的な活動として対象児の好きなバドミントンをを用いたこと、また、3時間目始めの教室になかなか入ることができない対象生徒に対して、直接授業プリントを見せながら本時の活動の説明を行い、参加するように促したことなど、対象生徒の実態を踏まえた留意点を検討し、授業を構成したことが要因と考えられた。

7 到達点と課題

本研究では、対象生徒が自己理解を深めることを目標とした指導として、「トリセツ」の作成を通して普段対象生徒が意識していない自分のことを客観的に見つめ、捉え直すことをねらいとした授業を行った。その結果、授業中の発言や記述から、本指導が対象生徒の自己理解を深めることに有効であることが示唆された。今回深めることができた自己理解を、どのようにして児童生徒の良好な人間関係の形成に役立ていくのか、その指導や支

援について検討することが今後の課題である。

8 謝辞

本研究に協力して下さった対象生徒と対象生徒のご家族、A 養護学校の先生方に、この場を借りて深く感謝申し上げます。

引用文献

- 柏木恵子 (1983) 「他者認知と自己認知はどちらが容易か・先か」, 『子どもの「自己」の発達』, 東京大学出版会, Pp. 64-69.
- 国立教育政策研究所 (2011) 「中教審が示すキャリア教育新たな方向性」, https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/kyo-uiku_career/siensiryoyou4-5.pdf (最終閲覧日 2016年12月6日)
- 柴田利男 (2011) 「幼児における自己と他者の理解」, 『北星学園大学社会福祉学部北星論集』, 第48巻, 1-13.
- 滝吉美智香・田中真理 (2011) 「思春期・青年期の広汎性発達障害における自己理解」, 『発達心理学研究』, 第22巻, 第3号, 215-227.
- 吉井秀樹・吉松靖文 (2003) 「年長自閉性障害児の自己理解, 他者理解, 感情理解の関連性に関する研究」, 『特殊教育学研究』, 第41巻, 第2号, 217-226.

参考文献

- 熊地需・佐藤圭吾・佐藤孝・武田篤 (2012) 「特別支援学校に在籍する知的発達に遅れの無い発達障害児の現状と課題ー全国知的障害特別支援学校のアンケート調査からー」, 『秋田大学教育文化学部研究紀要』, 教育科学部門第67巻, 9-22.
- 文部科学省 (2009) 『特別支援学校学習指導要領 説 自立活動編』, 海文堂出版.
- 田中真理 (2009) 「注意欠陥/多動性障害児・者における自己認識に関する研究動向」, 『東北大学大学院教育学研究科研究年報』, 第57集, 第2号, 359-386.

A Study on Facilitating Self-understanding in a Student with Handicaps: Through Making a Self-instruction Manual.

Yuka HOSHINO